

近代における女性書簡文の変遷―文体と結語を焦点として―

茗^{みよう}

荷^が

円^{まどか}

一、はじめに

近代の女性書簡文に関する日本語学的な観点からの研究には、橘（一九七七）（一九九八）を始めとし、小椋（一九九八）（二〇〇〇）、北澤（一九九九）などがある。小椋（一九九八）では、女性用書簡文例集における文末表現の使用例が報告され、北澤（一九九九）では、明治の女子学生の書簡文の待遇表現の特徴やその推移が報告されている。しかし、いずれも明治期が中心であり、その後の大正・昭和も含めた近代全体にわたる女性書簡文を対象としたものではない。また、本稿で取り上げる書簡用語と文体に特化した研究は飛田（一九九二）が挙げられるが、調査対象が男性中心であり、特定の人物のみの書簡資料である。

このように、近代の女性書簡文の研究は、未だ十分な調査がなされているとは言いがたい。近代は、言文一致運動などを通して口語文体が形成されるとともに、女子教育の普及により、女性が書簡文を書くという行為が一般化していった時期である。このような時期の女性の書簡文についての研究は、近代の女性語あるいは書簡文という実用文の位相の実態を知るうえで、非常に重要であると考えられる。

筆者はこれまで日本の明治中期から昭和前期の女性書簡文について、いくつかの観点から、その特徴と変遷の様相を明らかにしてきた。近代における女性書簡文の変遷

た(茗荷(二〇〇五)(二〇〇六)(二〇〇九)。本稿では、それらの結果もふまえ、調査時期に昭和戦中期を加え、近代全体を通しての女性書簡文の、とくに文体と結語に焦点をあてて、その特徴と変遷について見てゆきたい。

一―一 時期区分と資料

調査時期は、以下のとおり区分した。

明治中期(明治二〇年代後半～明治三〇年前半)

明治後期(明治三〇年後半～明治四五年)

大正期(大正元年～一四年)

昭和前期(昭和元年～昭和十一年)

昭和戦中期(昭和十二年～昭和二〇年)

資料は、書簡文の規範と実態という観点から、以下のとおり、各時期の両者の用例を比較しながら見てゆくこととする^{二二}。

・規範資料…女性書簡文例集(明治中期三〇三通、明治後期三〇九通、大正期三〇九通、昭和前期三一三通、昭和戦中期三〇三通 計一五三七通)

・実態資料…一般女性の書簡文(明治中期一六五通、明治後期八四通、大正期六三通、昭和前期三〇通、昭和戦中期三七通 計三七九通)

二、 文体

近代の女性書簡文の本文の文体を、文末に注目して、以下の四種に分類した^{四〇}。

候文体(「～申し上げ候」のように、文末が「候」で終わるもの)

文語文体（「とありけり也」のように、文末が文語で終わるもの）

口語文体（「～お願いいたします」のように、文末が口語で終わるもの）

混合文体（一通の書簡文の中で、上記の二つあるいは三つの文体が混在しているもの）
分類した各文体の例は、以下のようなものである（傍線は筆者による）。

【候文体】

一筆申上まゐらせ候 弥々御そろひ御機嫌よく御わたらせ悦び入り候昨日は御日がらもよろしく御婚禮よろづ御とゞこほりなく御調ひ成され候よし鶴亀の千代萬代かけて目出度御祝申上げ候この品甚だ恥入候へども御壽きの印までに進上いたし候

（「婚姻を祝ふ文」『草々かしこ』明治二六年）

【文語文体】

あらたまりたる年のはじめの御壽めでたく祝ひ終へまつりて、さてわがくりごと聞え上げむをば許させ給へ。御やさしき御心に、折に似つかはからぬ文なりとて、よもうち棄てさせ給はじと、かうすがりまつる妹の心を、さりともしとはおぼさゞらむを。
（以下略）
（「都の友に」『女子文章十二個月』大正六年）

【口語文体】

千代子の初難お祝ひ下さいまして、まことに美事なる五人ばやしに、色香もすぐれし桃の木までお添へ下さいまして、有り難く厚く御礼を申し上げます。

いたゞきました五人ばやしを眺めて、さもうれしさうに、声をあげて笑ふではございませんか、言葉も通ぜぬほどの子供にも、あの見事な五人ばやし、美しく、嬉しくてたまらないものと見えます。（以下略）

（「初難を祝はれて」『昭和女子手紙の文』昭和四年）

【混合文体】

（略）時に六時半、実に此日じゃ近來になき愉快なりき。私は亀戸に行く時既に三度に及ぶ。ここに至りていよいよ遠足ズキの名

近代における女性書簡文の変遷

高く相成申し候。（私の級にて催さるる遠足は最初より僅に二度がかせしのみ。其他一度もかかせし事なし。其かわり同級中にて一番物知りなり。他の人は一度ゆきし所はもはや行かざれども、私の遠足の目的は保養なれば幾度にて同じ所に行きます。も一東京近在の名所は知らぬ所なしといふも可なり。少し自慢でしやう）（以下略）（高橋貞書簡／父親宛て 明治三五年二月二六日）

二―一 文体の時期別の規範

書簡文例集には、文例とともに、女性書簡文の本文の文体がどのようなべきかという、規範が示されている。以下にその例を示す（傍線は筆者による）。

【明治後期】

候と云ふ字はもと、侍ると云ひて、貴人の御前に、侍坐するの意なりしを、更に、伺候の義なる、候ふと変りたりしなれど、孰れも、当時、通俗に行はれつゝ、ありし敬語なりきざるを、今は、ござります あります などやうに云ふ事となりたる以上は書簡にも、しか書くべきが道理なれども、言文、相ひ離隔せしより此方、猶、古への言語を存して、これを以て、書簡文は認むべきもの、如くなりしければ、已む無くも、其慣例に従ふべきなり、

（「女子書簡文」明治三〇年）

【昭和戦中期】

（略）周到綿密に書けるといふ強みは、特に口語文に著しいのであります。

候文は古い文体だけに、礼儀正しく、丁重で、重々しく、上品に、簡潔に、引きしまったところがあり、書きなれた人には、これほど自由な文体はないのですが、一般にはだん／＼用ひられる機会は少なくなつてまいりました。

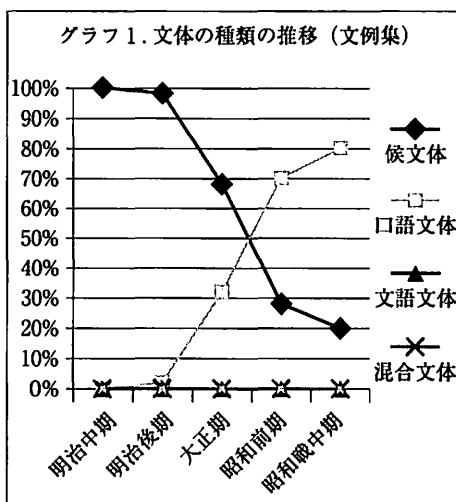
（「手紙の書き方」昭和一五年）

明治後期では、書簡文においては元來の言語で書くよう指示されており、昭和戦中期では、候文体を「古い文体」と称し長所を挙げながらも、實際は口語文体で書くのが一般的であると述べている。

	明治中期	明治後期	大正期	昭和前期	昭和戦中期
候文体	○	○	○	○	△
口語文体	×	△	○	○	○

表1. 文体の種類の推移 (文例集)

		明中	明後	大正	昭前	戦中
候	書簡数	303	304	205	89	63
	割合	100%	98.4%	66.3%	28.4%	20.8%
口語	書簡数	0	5	100	224	240
	割合	0%	1.6%	32.4%	71.6%	79.2%
文語	書簡数	0	0	3	0	0
	割合	0%	0%	1.0%	0%	0%
混合	書簡数	0	0	1	0	0
	割合	0%	0%	0.3%	0%	0%
計	書簡数	303	309	309	313	303
	割合	100%	100%	100%	100%	100%



文体の種類の推移を、以下、文例集の書簡文、一般女性の書簡文の順に、表、グラフに示す。

表一とグラフ一から、書簡文例集においては、明治中期・後期はほぼ全てが候文体であったが、大正期から候文体の減少が急激に生じ、反対に口語文体が急増して、昭和前期では、文体の主流は候文体から口語文体に逆転している。

もつとも、候文体も絶滅し

これらのように、書簡文例集に示されている規範を、時期別に整理すると、以下の表のようになる（なお、表中の○・△・×は規範としての度合を示し、○は必須、△は不問、×は非推奨を意味する）。

以上より、女性書簡本文の文体の規範は、昭和前期までは候文体とされていたが、大正期から変化が見られ、戦中には口語文体のほうが主流になっているといえる。

二 文体の種類の推移

たわけではなく、割合は低いが、昭和戦中期にもまだ見られる。なお、文語文体は全時期を通じて見られず、混合文体は、大正期で文語文体と候文体の混合がわずか〇・三％見られただけであり、それ以外は統一された文体で書かれている。これらの結果は、前出の各時期の規範に添っているといえよう。

一般女性の書簡文においては、次の表二・グラフ二から、明治中期では、候文体が八四・二％と非常に高いのであるが、明治後期からは一気に減少し、大正期以降では全てが口語文体となつてゐる^{五〇}。文語文体は全時期を通じて見られず、混合文体は明治後期まで、低い割合で見られる。

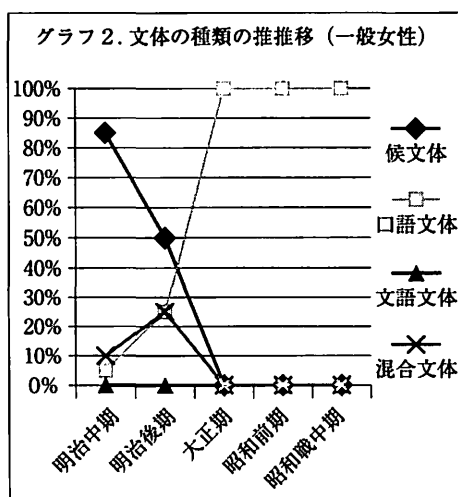
以上のことから、両資料ともに、大正期を境に候文体から口語文体への移行が見られるが、比較すると、一般女性の書簡文における文体の口語化の方が文例集よりも一時期分だけ早く、しかも急激だったといえる。

三、結語

結語は、書簡本文の最後の締めくくりとして書かれる結びのことである^{五〇}。本稿では、結語として典型的な「かしこ」「草々」などの一語での表現、「草々かしこ」「あなかしこ」などの複合表現とともに、「さよなら」「御機嫌よう」など、別れの

表2. 文体の種類の推移 (一般女性)

		明中	明後	大正	昭前	戦中
候	書簡数	139	42	0	0	0
	割合	84.2%	50.0%	0%	0%	0%
口語	書簡数	7	21	63	30	37
	割合	4.2%	25.0%	100%	100%	100%
文語	書簡数	0	0	0	0	0
	割合	0%	0%	0%	0%	0%
混合	書簡数	19	21	0	0	0
	割合	11.5%	25.0%	0%	0%	0%
計	書簡数	165	84	63	30	37
	割合	100%	100%	100%	100%	100%



挨拶ことばも結語相当の表現とみなして取り上げる。

結語は、以下の例のように用いられる。

(略) この事願ひに今日は参上せばやとせしを人参りて紛れ暮らし子供学校より帰りなどし候へば遂ひ出る事はなほで文に成り申候失礼の段御赦し下され度候　かしこ
(明治中期『通俗書簡文』「娘の躰を人にたのむ文」)

また次の例は、口語による挨拶ことばが結語としての機能を果たしていると考えられるものである。

(略) 幸ひからだは丈夫ですから精出してやつてみます　近く東京へ御帰りなさるとの事　御目にかゝつていろ／＼教へて頂くのを楽しんでゐます　さよなら
(明治後期『新体女子書簡文』「入校を祝ふ文　返事」)

三― 結語の規範

書簡文例集には、結語について、以下の例のような規範が示されている(傍線は筆者による)。

【明治後期】

(略) 冒頭は書かぬ場合あり、結びの言葉略すべからず。(略) 結びの言葉の最も簡単なるものには、かしこ。あら／＼かしこ。あなかしこ。かしこや。早々かしこ。などあり。世には、めでたくかくと書く人あれど、こは正しからぬ由に聞けり。甚だしきはかしこといふあられもなき当て字して、可祝など用ゐたるも往々見ゆ。さるはいと道理なき物から、よき折のはさてもありなん、凶事の時などにもあらば可祝と書きてあるべくもあらず。(略) 又かしこと書きあら／＼かしこと書くも時の都合によりてにぞ。

〔女子書簡文の作法〕明治四一年)

【昭和戦中期】

近代における女性書簡文の変遷

	明治中期	明治後期	大正期	昭和前期	昭和戦中期
結語の有無	絶対書くべき	絶対書くべき	絶対書くべき	言及なし。 場合により省略も可。	言及なし
結語の典型例	かしこ、あなかしこ	かしこ	かしこ	かしこ、さよなら	かしこ、さよなら

(略) 男子用の場合、婦人用としても候文の特に儀式の手紙には、○謹言(特敬向き) ○敬具、拝具(丁重向き)を使ひますが、普通には○かしこ○さやうなら○以上の三つで用は足りませう。「かしこ」は「畏し」の略で、候文にも口語文にも使ひますが、候文では、○あなかしこ(特敬向き) ○めでたくかしこ(慶事の場合) ○あら／＼かしこ(男子用「勿々」に当る)なども用い、崩して書いた「かしこ」を見誤つて「かしこ」とし、更に「可祝」と当字するやうにもなりました。

口語文では、○さやうなら(丁重向き、「さようなら」は誤) ○さよなら(普通向き) ○では(略式)など。「以上」は書き込んだ事項の多い時に使ひます。
〔主婦之友花嫁講座〕第五卷 昭和一五年)

明治後期では、結語は必ず書くようにと指示され、また例として「かしこ」や「かしこ」に他の語を加えたものが挙げられている。昭和戦中期では、結語の有無についての言及はされていない。結語の例としては「かしこ」が中心ではあるが、場合によっては男性が用いているものも挙げられている。また、口語文体での結語として、「さやうなら」も挙げられている。明治後期に比べ、男女の位相差が小さくなっているようにも見てとれる。

文体と同様、結語の規範について、時期別に整理したものを、上の表に示した。

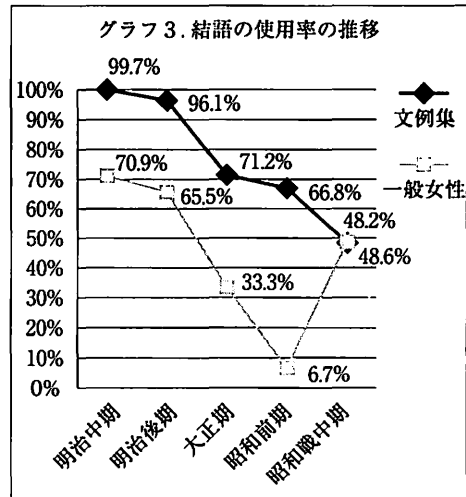
大正期までは結語は絶対に書くべきものとされているが、昭和前期からは、その必要性に関して言及されていない。つまり、この時期から、結語使用の規範性が薄れているということが見て取れる。それでも、用いる場合には全時期を通じて、「かしこ」という女性書簡文特有の伝統的な結語がその典型として示され続けている。

三―二 結語の使用率の推移

結語の使用率の推移を、以下の表、グラフに示す。

表3. 結語の使用率の推移

	明治中期		明治後期		大正期		昭和前期		昭和戦中期	
	結語数／書簡数	割合	結語数／書簡数	割合	結語数／書簡数	割合	結語数／書簡数	割合	結語数／書簡数	割合
文例集	302／303	99.7%	297／309	96.1%	220／309	71.2%	209／313	66.8%	146／303	48.2%
一般女性	117／165	70.9%	55／84	65.5%	21／63	33.3%	2／30	6.7%	18／37	48.6%



書簡文本文の文体の口語化より、結語の方が保守性が強かったことを表しているといえよう。とはいえ、前出の規範の表と対照すると、大正期は「絶対書くべき」とされているにもかかわらず、文例集においても、結語が書かれていない書簡文が約三〇%も見られ、規範と実態のずれが見られる。

一般女性の書簡文では、結語の使用率は減少の一途であったが、昭和戦中期で再び増加している。この逆行傾向には、当時の資料の特殊性が理由として考えられる。すなわち、戦中期の資料は、主に銃後から戦地に赴いている夫や兄、兵隊への書簡文が多かった。このような関係・状況を考えると、おそらくは一般的な趨勢とは異なり、結びの言葉が省略されない、形式の改まった書簡文を書こうとしたのではないだろうか。

以下は、銃後から前線に向けて書かれた一般女性の書簡文の末尾部分である。

上の表三・グラフ三から、結語の使用率は両資料とも、大正期で大幅に減少していることが分かる。また、おおむね全時期を通じて、文例集の方が一般女性の書簡文よりも、結語の使用率は高くなっている。

文例集では、結語の使用率は昭和戦中期で約半数程度になるが、一般女性の書簡文では、大正期にすでに結語の書かれていない書簡文の方が多くなっていて、その逆転は、文例集より二時期分早い。

文例集における、結語の書かれた書簡文と書かれていない書簡文の割合の逆転は昭和戦中期であるが、これは、グラフ一で見たように、文体において、候文体と口語文体の割合が逆転した昭和前期よりも一時期、遅れている。このことは、

表4. 結語の種類推移 (文例集)

		明治 中期	明治 後期	大正期	昭和 前期	昭和 戦中期
かしこ系	書簡数	300	292	176	175	114
	割合	99.3%	98.3%	80.0%	83.7%	78.1%
草々系	書簡数	2	1	22	2	20
	割合	0.7%	0.3%	10.0%	1.0%	13.7%
さよなら系	書簡数	0	3	21	25	8
	割合	0%	1.0%	9.5%	12.0%	5.5%
御機嫌系	書簡数	0	0	0	1	0
	割合	0%	0%	0%	0.5%	0%
では系	書簡数	0	0	0	3	1
	割合	0%	0%	0%	1.4%	0.7%
その他	書簡数	0	1	1	3	3
	割合	0%	0.3%	0.5%	1.4%	2.1%

*かしこ系の例…「かしこ」「あなかしこ」「あらあらかしこ」など。 *さよなら系の例…「さよなら」「さやうなら」「左様なら」など

*草々系の例…「草々」「匆々」「早々頓首」「早々不」など。 *御機嫌系の例…「御きげんよう」「御機嫌よろしく」など

*では～系の例…「では」「ではまた、」など *その他…「あらあら」「おやすなさい」など

表5. 結語の種類推移 (一般女性)

		明治 中期	明治 後期	大正期	昭和 前期	昭和 戦中期
かしこ系	書簡数	106	28	0	0	2
	割合	90.6%	50.9%	0%	0%	11.1%
草々系	書簡数	3	12	0	0	0
	割合	2.6%	21.8%	0%	0%	0%
さよなら系	書簡数	5	11	10	0	15
	割合	4.3%	20.0%	47.6%	0%	83.3%
御機嫌系	書簡数	0	4	0	0	0
	割合	0%	7.3%	0%	0%	0%
では系	書簡数	0	0	9	2	1
	割合	0%	0%	42.9%	100%	5.6%
その他	書簡数	3	0	2	0	0
	割合	2.6%	0%	9.5%	0%	0%

の次の書簡文を挙げておく。

また、上と対照的な書簡文として、昭和前期（まだ戦争の兆しが見られない頃）

一七年二月一〇日）

（略）内地を出発致します時、信太へ寄って来ました時、ちょっとした間に昭子ちゃんの人びた姿には驚きました。（略）末筆では御在いますがお身体をお大切に遊ばして軍務にお励みくださいませ。かしこ（市川君子書簡／兄宛て昭和

（略）浅海の叔母さんお出下さいました由、姉さんも少しは楽でせう。でも何分年寄ですから、若い者のやうには動けない事でせう。去年の此頃はお母様の手伝つて頂いてお産の仕度や障子貼りなど忙しくやつてゐた頃です。はや一年経つて藤ちゃんのお誕生日も来ます。此頃は一足二足位歩きます。

右御返事まで

（難波清子書簡／兄宛て昭和一〇年二月二二日）

末尾部分のみであるが、読み比べると、結語の有無だけでなく、前者の、時代による緊張感のようなものが際立って見えよう。

三―三 結語の種類推移

次に、使用された結語の種類推移を、上の表四、表五に示す。

文例集の書簡文では、全時期を通じて、「かしこ」系の結語の割合が最も高いが、

時期が進むにつれ、緩やかな減少傾向が見られ、中では大正期になつての減少が、比較的急である。その代わりに、「草々」系や「さよなら」系の結語が用いられるようになるものの、合わせても二割に満たず、それ以上の増加の傾向は見られない。三―二で見たような、結語の使用自体の急減の中にあつても、なお用いる場合には、「かしこ」という伝統的・規範的な結語が選ばれたのである。

一般女性の書簡文では、明治後期までは「かしこ」系の結語が中心的存在であるが、大正期で一転して「さよなら」系と「では」系が多くの割合を占めるようになる。その後さらに、昭和前期では「では」系、戦中期になると、「さよなら」系と、口語的表現の結語が主になっている。この動きは、全時期を通じて「かしこ」系が中心であつた文例集とは傾向が明らかに異なり、実態のほうの変化の速さを示している。

四、文体と結語の關係^と

四―一 文体と結語の使用率

近代の女性書簡文の中心的な文体である候文体と口語文体における、文例集と一般女性の書簡文の結語の使用率を、それぞれ次頁表六・グラフ四と、表七・グラフ五に示す。

グラフ四から、文例集では全時期を通じて、候文体の方が、口語文体よりも、結語の書かれる割合が高いことが分かる。時期が進むにつれて、その割合は減少してはいるものの、候文体の書簡文では最少でも八割以上に結語が用いられていて、候文体の書簡文には結語を置くということに、時期的な変化はほぼなかったといえる。

いっぽう、口語文体を見ると、大正期と昭和戦中期で、結語の書かれる割合が特に低くなっている。これを、前出のグラフ三「文例集の結語の使用率」と併せて見てみると、文例集全体で、結語の書かれる割合が急激に減少している時期は、同じく大正期と昭和戦中期であり、重なっていることが分かる。つまり、結語の減少は主に、口語文体の書簡文で著しかったということである。

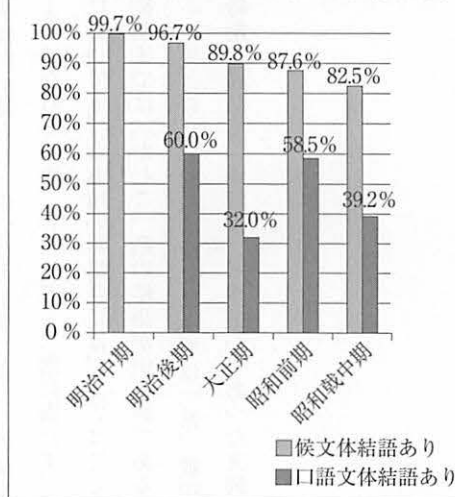
表6. 文体別結語の使用率の推移（文例集）

		明中	明後	大正	昭前	戦中
候 文体	結語数/ 文体数	302/303	294/304	184/205	78/89	52/63
	結語の 使用率	99.7%	96.7%	89.8%	87.6%	82.5%
口語 文体	結語数/ 文体数	0/0	3/5	32/100	131/224	94/240
	結語の 使用率	—	60.0%	32.0%	58.5%	39.2%

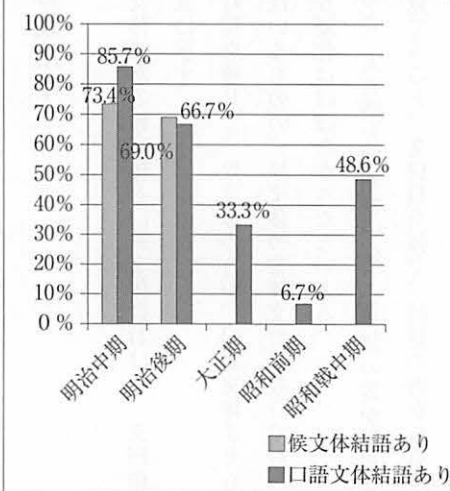
表7. 文体別結語の使用率の推移（一般女性）

		明中	明後	大正	昭前	戦中
候 文体	結語数/ 文体数	102/139	29/42	0/0	0/0	0/0
	結語の 使用率	73.4%	69.0%	—	—	—
口語 文体	結語数/ 文体数	6/7	14/21	21/63	2/30	18/37
	結語の 使用率	85.7%	66.7%	33.3%	6.7%	48.6%

グラフ4. 文体別結語の使用率の推移（文例集）



グラフ5. 文体別結語の使用率の推移（一般女性）



一般女性の書簡文では、グラフ五から明らかなように、口語文体での結語の使用率が、明治中期には八割以上だったのが、昭和前期の一割以下にまで急減しているのに、戦中期にはまた五割近くまで上がっている。表二・グラフ二で確認したように、口語文体は明治中期・後期では非常に割合が低く、女性書簡文としては先進的な文体であったが、それでも結語を用いるという習慣のほうは維持されていたといえる。それが口語文体が一般化した大正期以降では、それにとまって結語の使用率も急減したことになる、文体についても結語についても、従来のあり方から大きく変化した。ただし、昭和戦中期における結語使用の復活は、三―二で述べたように、資料の性格の偏りによるものと考えられる。

なお、一般女性の書簡文における候文体は、明治中期・後期にのみ見られたが、結語の使用率は七割を越えるとはいえず、同時期の口語文体での結語の使用率とそれほどの差は認められない。

両資料の結果を見比べてみると、候文体における結語の使用率が、書簡文例集のほうにおいて高いのは、その規範的な性格からすれば当然であろう。そ

れにたいして、口語文体における結語の使用率は、昭和前期を例外とすれば、両者にそれほど大きな隔たりは見られない。これは、書簡文例集において、三——で見たように、明治期に引き続き、大正期までは結語は「絶対に書くべき」としていたにもかかわらず、文例としての口語文体の書簡文では実態に近い示し方にならざるをえなかった、つまり旧来の候文体ではなく、新たな口語文体に対応する結語に関する新たな規範をまだ提示しえなかったのではないかと推測される。昭和前期の書簡文例集における口語文体の結語の使用率の急増は、前時期にたいする一種の反動と見られ、それは何よりも、同時期の一般女性の口語体書簡文における、いちじるしい低使用率が物語っているといえよう。

四—— 文体と結語の種類

文例集における候文体と口語文体の書簡文において用いられた結語の種類を、次の表八とグラフ六に示す。

◆候文体 + 「かしこ」系

(略) 御寒さのきびしきに御立出はおよろしかるまじく御止め申上よとに御座候 御こゝろ安だてに かしこ

(「雪の日人のもとに 返事」『通俗書簡文』明治二九年)

(略) もし御心當りも御座候はゞ、御世話願ひたく、あなた様御知合も広く候へば、自然御心付の方などあるべくやと、御面倒ながら御頼み申上げ候。 あらあらかしこ

(「乳母の周旋を頼む」『婦人よろずの手紙』大正六年)

◆口語文体 + 「かしこ」系

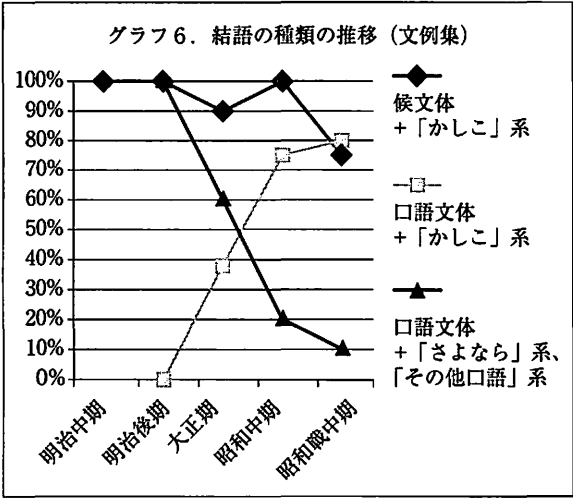
(略) 随分こい紫で、美しかったのですが、こんなに色があせてしまつて、——でも花は大きいでせう。皆さまよろしく。かしこ。

(「都の友に」『女子文章十二個月』大正六年)

近代における女性書簡文の変遷

表 8. 文体別結語の種類推移 (文例集)

		明治中期		明治後期		大正期		昭和前期		昭和戦中期	
		書簡数	割合	書簡数	割合	書簡数	割合	書簡数	割合	書簡数	割合
候文体	かしこ系	300	99.3%	292	99.3%	162	88.0%	77	98.7%	39	75.0%
	さよなら系	0	0%	0	0%	1	0.5%	0	0%	0	0%
	その他口語系	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
	草々系	2	0.7%	1	0.3%	20	10.9%	1	1.3%	13	25.0%
	その他	0	0%	1	0.3%	1	0.5%	0	0%	0	0%
口語文体	かしこ系	—	—	0	0%	12	37.5%	98	74.8%	75	79.8%
	さよなら系	—	—	3	100%	20	62.5%	25	19.1%	8	8.5%
	その他口語系	—	—	0	0%	0	0%	4	3.1%	1	1.1%
	草々系	—	—	0	0%	0	0%	1	0.8%	7	7.4%
	その他	—	—	0	0%	0	0%	3	2.3%	3	3.2%



上の表八とグラフ六から、候文体 + 「かしこ」系という組み合わせは、時期が進むにつれて、少しずつ減少してゆく傾向にあることが分かる。反対に、口語文体 + 「かしこ」系という組み合わせは、明治期は見られなかったのが、大正期から昭和前期にかけて急増し、さらに戦中期にも増加し続けていることが分かる。その一方で、口語文体 + 「さよなら」系・「その他口語」系という組み

私も一生懸命に働きました、では……
（「山里から」）昭和女子手紙の文（昭和四年）

おなつかしい貴女のお手紙さえ頂ければ、それで十分ですよ。
とにかくおすこやかに御勉強なされませ。

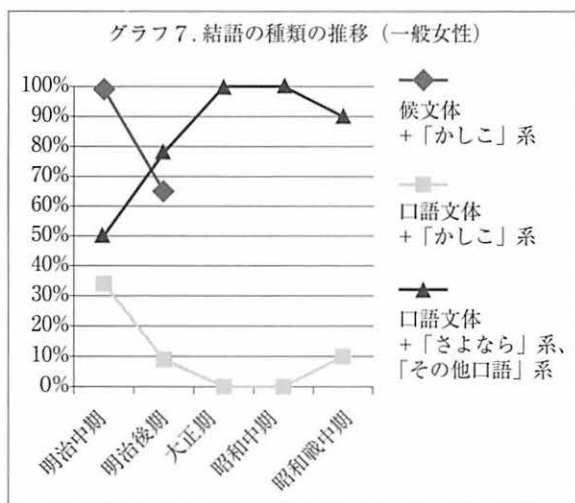
（「別荘へ友を誘ふ」）「婦人よろづの手紙」大正六年）

（略）東京へ、東京へ、とあんなに憧憬れてゐた私の心も、全く消え失せてしまひました。たゞおなつかしい貴女のお手紙さえ頂ければ、それで十分ですよ。
（略）私の立つ日がきましたら、改めてお知らせ致します。ではよくお母様とも御相談なすつてね。さやうなら。

◆口語文体 + 「さよなら」系、「その他口語」系

表9. 文体別結語の種類（一般女性）

		明治中期		明治後期		大正期		昭和前期		昭和戦中期	
		書簡数	割合	書簡数	割合	書簡数	割合	書簡数	割合	書簡数	割合
候文体	かしこ系	99	97.1%	19	65.5%						
	さよなら系	1	1.0%	0	0%						
	その他口語系	0	0%	0	0%						
	草々系	2	2.0%	10	34.5%						
	その他	0	0%	0	0%						
口語文体	かしこ系	2	33.3%	1	7.1%	0	0%	0	0%	2	11.1%
	さよなら系	2	33.3%	9	64.3%	10	48%	0	0%	15	83.3%
	その他口語系	1	16.7%	2	14.3%	11	52%	2	100%	1	5.6%
	草々系	0	0.0%	2	14.3%	0	0%	0	0%	0	0%
	その他	1	16.7%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%



合わせは、大正期以降急減している。これらのことと、前出の表四の、文例集全体における結語の種類の変移の表を併せて考えると、全体での「かしこ」系の割合の減少は、口語文体ではなく、候文体におけるものであり、口語文体ではむしろ、「かしこ」系の割合が時期が進むにつれ、増加傾向にあるといえる。この変遷に関しては、次のような背景が想定される。

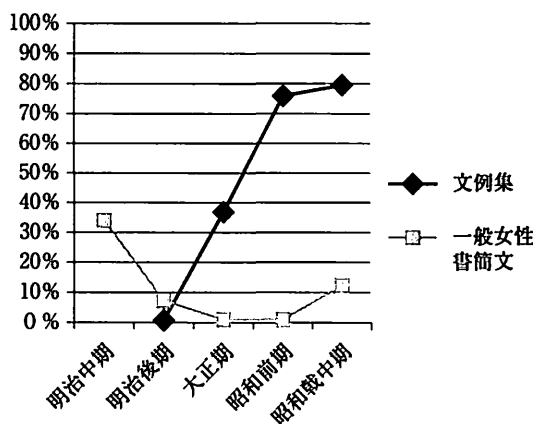
まず明治後期、口語文体による書簡文という、新しいスタイルが実際に見られ始めると、結語もまた、それに合わせるように「さよなら」系などの口語的表現を結語として試用する傾向にあった。それが大正期に入り、口語文体と候文体が拮抗するようになると、結語も新しい口語的な表現と、伝統を踏襲する「かしこ」系とが、拮抗するようになった。それが、昭和前期に入り、口語文体が一般化すると、結語の使用率自体は減るものの、用いる場合には逆に、規範性を維持し、書簡形式としてのバランスをとるように、伝統的な「かしこ」系を用いるようになったのではなかろうか。事実、文例集の規範を見ても、本文の文体としては口語化を推奨しているのたいして、結語の典型例は「かしこ」が残されているのである。そして、この口語文体+「かしこ」系という組み合わせは、昭和戦中期にも継続されていたのを見ると、大正期の結語の多様化による混乱に対する

一時的な揺り戻しではなく、口語文体における改まった女性書簡文の規範として定着したといつてよいだろう。一方、候文体における結語はむしろ、時期が進むにつれ、「かしこ」系集中から、「草々」系などに分散化していき、規範性が希薄化している。これは、候文体を用いる書簡文自体がすでに実態には即さなくなっていたことの表れと考えられる。

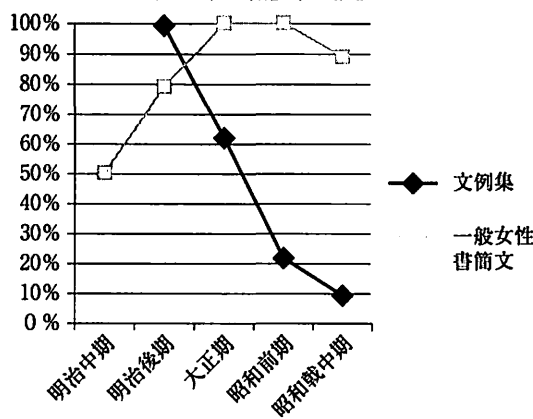
次に、一般女性の書簡文について、以下表九とグラフ七に示す（前頁）。大正期からは口語文体のみとなっているため、その結語の種類を見てゆく。

まず候文体では、明治後期までに限り、「かしこ」が主流でありつつも、減少が見られる。口語文体では、「かしこ」系は大正期以降

グラフ 8. 資料別口語文体+「かしこ」系の推移



グラフ 9. 資料別口語文体+「さよなら」系、「その他口語」系の推移



ほとんど見られなくなるのになんて、時期によって偏りが見られるものの、結語を使用する場合には「さよなら」系か、あるいは「その他口語」系が用いられるようになったといえる。

ところで、次のグラフ八・九で、両資料における、口語文体+「かしこ」系と、口語文体+「さよなら」系および「その他口語」系の割合の変化を比べてみると、その様相が対照的であることが分かる。この結果は、文体の口語化、結語の使用率の低下、結語の種類の多

様化などで見られたように、実態の変化が先行し、それに追従する形で規範が変化するという傾向とは明らかに異なる。

これは、書簡文例集があくまでも規範としての結語の形式を存続させようとしたのになんとして、実際に書かれた書簡文のほうは大勢として、もはや伝統的な形式にこだわることなく、まさに実用的かつ日常的な文章としての表現を選ぶようになったということを物語っているといえる。

五、まとめ

近代の女性書簡文における文体と結語について、ここまでの検討により明らかになったことをまとめると、以下ようになる。

一、文体は、明治中期では候文体が中心であったが、時期が進むとともに減少し、口語文体が中心となっていた。その転換期は大正期であり、昭和前期ではほぼ全面的に口語化した。このような変化は、文例集よりも、一般女性の書簡文の方が一時期早く見られた。

二、結語は、両資料ともに、時期が進むにつれて、使用率の低下が見られた。これは、文体の口語化に伴う、結語という形式の脱規範化の傾向であると解釈できる。また、文例集よりも、実際の書簡文の方が、おおむね結語の使用率は低く、減少スピードも早い。

三、結語の種類は、文例集では全時期を通じて、伝統的な女性書簡用語である「かしこ」系が主流ではあるものの、両資料とも、時期が進むにつれて、減少する。特に一般女性の書簡文でそれが著しく、代わって「さよなら」系あるいは「その他口語」系の、口語的表現による結語が主流となっている。

四、結語と文体との関係を見てみると、結語の使用率は、文例集では、全時期を通じて候文体よりも口語文体の方が低く、また減少の時期も早い。種類については、両資料とも、候文体における「かしこ」系の割合が減少しているが、文例集と一般女性の書簡文では傾向が異なる。文例集での「かしこ」系は、候文体では減少するものの、口語文体ではむしろ増加が見られた。一方、一般女性の書簡文では、昭和戦中期を除き、口語文体での「かしこ」系は全体として減少の傾向にあり、「さよなら」系やその他の口語的表現が増加している^{二〇}。

一般に、文章の口語化が進められたのは、大正期であるとされる。それはおもに、文学、新聞、学校教科書などの文章において指摘

されてきたことであつたが、今回の調査によって、書簡文という、実用的・日常的な位相の文章においても、同様の現象が認められ、しかもそれが一気に、女性の書き手の文章においても確認されたことになる。また、書簡用語の結語についても、「かしこ」という、女性専用とみなされた、伝統的な語が本文の口語化にもなつて減少し、口語的な結語が試みられるようになっていくさまも、今回の調査によって明らかになったことである。

規範と実態という、実用文としての書簡文ならではの関係において、規範が実態に追隨して変化するのは当然としても、本文の文体であれ、結語の有無・種類であれ、両者の具体的なずれ具合や、新たな規範を示しえずに混乱することもあることなども、今回の調査において判明したことである。

今後は、近代から現代の女性書簡文の変遷の実態を明らかにするために、従来の時期の資料の補充と、終戦後の資料の追加も行い、合わせて、他の言語項目にも調査を広げるとともに、男性の書簡文との比較や、他のジャンルの女性の文章との比較も行つてゆきたい。

注

(一) 書簡文例集の装丁、文体、文字表記などから時期を区分した小椋(一九九八)を参考にした。

(二) 茗荷(二〇〇五・二〇一〇)においては、資料とした書簡文(三八四二通)を次の四種類に分類し比較してきた。【一】女性書簡文例集(二五三七通)、【二】女流作家の書簡文(九九一通)、【三】一般女性の書簡文(三七九通)、【四】雑誌の懸賞に寄せられた書簡文(九三五通)。本稿ではこの四種の中から対比が際立つ、書簡文の規範としての【一】と、一般的な実例としての【三】を取り上げた。

資料の選択にあたって、【一】女性書簡文例集は、各時期の中で、なるべく出版年の集中を避ける、様々なシチュエーションの用例が網羅されている、特定の年齢や職業の女性を対象としていない、文例の長さが適当であるなどを勘案して、選択した。【三】一般女性の書簡文は、現在入手可能な出版物で、受取人と差出人が明確である私信を対象とし、葉書や代筆は除外した。【二】【三】は共に実際に書かれた書簡文であるが、【二】は職業上、文章意識が高いと思われるため、区別をして調査した。【四】雑誌の懸賞に寄せられた書簡文は、一般の女性を書いたものであるが、仮の受取人を想定し、見られることを意識して書かれていることや、雑誌編集者の修正が加わっている可能性が考えられることなどの理由から、創作的な要素が加わった書簡文と判断され、性質としては、規範と実例の中間に位置付けられる。

文例集に比べて、一般の書簡文は、資料収集自体の困難とともに、諸々の理由により採用を控えざるをえなかったものもあり、結果的にまだ十分な量とは言えない。今後もお継続的に探索・収集してゆきたい。

三) 書簡文の性質を考慮すると、差出人と受取人の関係や年齢、書簡文の内容なども、書簡文の形式に影響を与える可能性は十分に考えられるが、本稿の中心的な目的は、近代の女性書簡文の変遷の全体像を捉えることにあるため、個々の問題には深く立ち入らない。なお、このような視点による先行研究に、飛田(一九九二)や茗荷(二〇〇五)などがある。

四) 文体の分類は、北澤(一九九九)を参考にし、一〇〇%同一の文体で書かれている書簡文だけでなく、便宜上、同一の書簡文の中の八〇%以上が同じ文体で書かれていれば、それをその種類の文体とみなし、それ以下の場合には、「混合文体」とした。

五) 茗荷(二〇一〇)によると、女流作家の書簡文では、大正期以降も候文体は割合は低いが見られている。よって、本結果はあくまで今回取り上げた資料に限ってのことであり、大正期以降の実際の書簡文が全て口語文体で書かれているわけではない。

六) 一般女性の混合文体は、明治中期では一九通中一四通、明治後期では二一通中一六通が、候文体と口語文体の混合であった。明治期で既に口語文体の萌芽が見られており、実態における文体の口語化の早さが伺える。

七) 結語の対とされる頭語は、筆者の調査によれば、使用率や種類に顕著な特徴が見られなかったこと、また現在のような「前略―草々」「拝啓―敬具」のような対での使用も目立っては認められなかったことなどから、本稿では取り上げなかった。なお、男性の書簡文の頭語、結語を調査した先行研究に、小椋(二〇〇〇)がある。

八) 結語の種類としては、「かしこ」「あなかしこ」などの「かしこ」系、「草々」「敬具」などを一括して「草々」系、「さよなら」「さやうなら」などの「さよなら」系、「御機嫌よう」「御機嫌よく」などの「御機嫌」系、「では」「ではまた」などの「では」系、「その他口語」系の、六種に分類した。

九) 茗荷(二〇〇六)によると、文体と結語は密接にかかわっており、結語の使用率は、候文体の書簡文の方が、口語文体での書簡文よりも、高くなっていること、結語の種類は、候文体には、「かしこ」系の結語の割合が高く、口語文体には「さよなら」系を中心とした、口語表現による結語が中心である。同論文の対象時期は、大正期が中心であったが、本稿では全時期を通じて検証した。

一〇) 〈表八〉は、結語の主な種類である、「かしこ」系、「さよなら」系、「草々」系、「その他口語」系(「御機嫌よう」「では」などを併せた口

語的表現、「その他」の五種類の推移を取り上げた。(表五では、「その他口語系」を細かく分類したが、表八、表九では、それらを一括して「その他口語」系としてある。)

一(二) ちなみに、現代の書簡文例集を見ると、頭語と結語は女性でも「拝啓」「敬具」の例が主流である。これらは男性が使用してきた結語であり、書簡文におけるジェンダー性は希薄化しているといえる。

資料および対象書簡数

図表一九

明治中期 (368通)	文例集	①『草々かしこ』文の家桜州(紅葉女史)(1893) 大阪出版(29通) ②『通俗書簡文』堀田良平編(1994)『樋口一葉全集』第4巻(下) 筑摩書房より(108通) ③『女子書簡文』下田歌子(1897)『家庭叢書』第1編 博文館(106通) ④『女子記事文』(1898) 久保田蓬菫(60通)
	一般女性書簡文	①高橋貞(明治29年～明治34年)―高橋和子編(1997)『高橋貞書簡―135通の手紙が語る女学生の生活記録―』インパクト出版(102通) ②一般女性混合(明治23年～29年)―伊東夏子、田中みの子など、樋口一葉周辺の女性ら24名 野口碩編(1998)『樋口一葉来簡集』筑摩書房
明治後期 (393通)	文例集	①『最新女子書簡文』紫水散人(1905) 此村欽英堂(69通) ②『女子手紙のふみ』桜国子(1906) 岡田文祥堂(44通) ③『女子書簡文の作法』加藤壽子(1908) 修文堂(110通) ④『新体女子書簡文』読売新聞社編(1912) 読売新聞社(86通)
	一般女性書簡文	①安井てつ(明治37年～明治41年)―青山なを編(1965)『若き日のあと 安井てつ書簡集』安井てつ先生没後二十年出版行会(36通) ②福田英子(明治39年～明治42年)―唐沢柳三編(1958)『福田英子書簡集』ソール出版(16通) ③高橋貞(明治35年～明治36年)―高橋和子編(1997)『高橋貞書簡―135通の手紙が語る女学生の生活記録―』インパクト出版(102通)
大正期 (372通)	文例集	①『婦人よろづの手紙』桑田春風(1917) 岡村書店(92通) ②『女子文章十二個月』内海月杖(1917) 東京社(103通) ③『女子美的候文』麻生路郎(1922) 藤谷崇文館(114通)
	一般女性書簡文	①谷川多喜子―谷川俊太郎編(1997)『母の恋文 谷川徹三・多喜子の手紙』新潮社(63通)
昭和前期 (343通)	文例集	①『昭和女子手紙の文』井澤水葉(1929) 金竜堂書店(121通) ②『活かして使へる女子手紙文』盛岐多雄(1935) 春江堂(89通) ③『新しい女子手紙文範』中央公論社編「婦人公論」新年号別冊付録(1935) 中央公論社(103通)
	一般女性書簡文	①難波清子(昭和2年～昭和11年)―中野近恵編(1937)『手紙』難波英夫出版(30通)
昭和戦中期 (340通)	文例集	①『女子書簡文』吉田茂松(1937) 書壇者出版部(42通) ②『模範女子書簡文』修文館編集部、五十嵐力校閲(1939) 修文館(70通) ③『主婦之友花嫁講座』第5巻「習字兼用手紙の書き方」(1940) 主婦之友社(102通) ④『戦時女性文範』生田花世(1943) 愛読社(89通)
	一般女性書簡文	①一般女性混合(昭和16年～昭和17年)―市川スミ子、市川紀行編(2004)『戦地からの手紙 市川甚兵衛・スミ子往復書簡』筑摩書林(14通) 川島さと子、川島正巳、川島さと子共著(1966)『愛の手紙は幾歳月』朝日新聞社(23通)

参考文献

- 小椋 秀樹（一九九七）「明治期の女子書簡文における「参らせ候」の衰退」「語文」七五―七六
- （一九九八）「書簡研究資料としての明治往来物」「論究日本文学」六九
- （二〇〇〇）「明治時代の手紙文例集」「日本語学」一九―二
- 北沢 尚（一九九九）「明治時代の女学生の書簡の文体」「東京学芸大学紀要」二―五〇
- 佐藤喜代治（一九九〇）「候文の性格」「日本語学」九―八
- 鈴木 直枝（二〇〇六）「明治前期における女性の手紙文―木村熊二・鏡子往復書簡の検討」「東北生活文化大学・東北生活文化大学短期大学部紀要」三七
- 橘 豊（一九七七）「書簡作法の研究」風間書房
- （一九九八）「手紙文の国語学的研究」風間書房
- 日外アソシエーツ編（一九九七）「日記書簡集解題目録二」日外アソシエーツ
- 飛田 良文（一九九二）「東京語成立史の研究」東京堂出版
- 真下 三郎（一九八五）「書簡用語の研究」溪水社
- 茗荷 円（二〇〇五）「明治期の女性書簡文の結語」[Kyoritsu Review] 11111
- （二〇〇六）「近代の女性書簡文の結語―大正期を中心に―」「表現研究」八四
- （二〇〇八）「与謝野晶子の書簡文―その表現的特徴と時期的変化―」「聖心女子大学大学院論集」聖心女子大学三〇―二
- （二〇〇九）「昭和前期の女性書簡文の結語と文体」「聖心女子大学大学院論集」三一―二
- （二〇一〇）「近代日本女性書簡文の研究」（聖心女子大学博士論文）
- 山根木忠勝（二〇〇六）「通俗書簡文」にみる移行期の書簡文体」「日本語日本文学論業」(一)

付記 本稿は日本語学会二〇一〇年度秋季大会（二〇一〇年一〇月二四日於愛知大学）における口頭発表に加筆修正をしたものです。席上、こ

教示下さった先生方に感謝申し上げます。